



①さあ仕事場へ



②一日はみんなで楽しくスタート

忘れられない記憶がある。

2003年夏、全障研第37回滋賀大会。万雷の拍手が鳴りひびく光の中から舞台裏に戻って来た田中昌人さんは満面の笑顔だった。

記念講演「発達保障を民主主義の光に」は、障害を理由にした不就学を大きく減少させてきた20世紀の歴史に学び、「ヨーロッパで目指されているように」「自立と自律」「生産的な諸活動への参加」「社交関係、地域参加、レクレーション、余暇の保障」「家庭での役割の取得」という4領域で、幅広くトータルに教育が通常の人たちにも、障害のある人たちにもその人たちに相応しく必要であるということが専門家の協力を得て提起されています」と指摘。

これにつづく21世紀の課題として、「生涯にわたって日本国憲法や国際人権規約の精神を継続的に実現していく」とともに、「日本国憲法第27条（労働権）、第28条（団結権）と結んだ発達保障を」と提案していた。

デンマークの「定点観測地」ヘルシン



③しっかりとらる



④右からアルバート、ルイーセ施設長、副施設長、リケさん（SPUC）

ガー自治体。労働体験センターを再訪すると顔見知りになった副施設長のクヌートが案内してくれた。

利用者は約250人。スタッフ65人。仕事は、食堂の厨房や掃除、木工、金属工房、テキスタイル、暖房用の薪づくり、花卉にハーブ栽培、そしてテレビやラジオ番組づくりなど多様。施設利用費は、軽度の人で1日259クローネ（1DKK約20円）、重度の人は1日699クローネ。利用者が生まれた自治体がヘルシンガー市へ支払う。自己負担はない。「STU（特別に企画された教育）」という新しい教育制度を活用して、16歳から25歳の若者たちが3年間通うことができる。教科書ではなく、課外活動や外国での研修、さまざまな体験活動を通じて生き方や社会を学ぶことが目的だ。STUは、前号で紹介したエグモント国民高等学校でも実施されている。ここでは現在34人が学び、学生寮もあるそうだ。93年にはじめて訪ねた頃は、町には働く場は作業所が一つだけだった。10年後、軽度障害者の労働体験センターがつけられ、2011年からは、デイサービス

スもとりにくまれている。

「ペンケルダマス通り」にようこそ」と施設長のルイーセさんが待っていてくれた。結婚して近所に住むリケさんと利用者のベラン・アルバートさんといる。ここは、入所施設の跡地（ペンケルダマス通りは地名）につくられた「SPUC」（9つのグループホーム、24時間対応の介護体制のある集合住宅、高齢障害者住宅、社会教育的サポートセンター、余暇活動の場）だ。スタッフは80人。人気の職業で1名の欠員募集に90名が応募するそうだ。

人口6万のヘルシンガー自治体には、この「SPUC」の他に、いくつかのグループホームと24時間ケア付のグループホーム（第1回紹介のクロンボフス）がある。入所施設はたしかに解体され、その地域に、必要なサポートのある複合的・総合的な近代的モダン住宅群がつくられている。小さな町の「脱施設化」の具体化は、「なくす」ことでなく「つくる」こと、生活を支えることなのだ。結婚して3年というリケさんは、障害

◆◆◆

者年金を受給して、近所の家で暮らしている。ホームアドバイザーが訪問して、日常生活のサポートをしてくれる。一日の日課や生活リズムもアドバイザーをもらう。パートナーは「フレックス・ジョブ（朝7時から午後1時までの短時間労働）」で働いているそうだ。

55歳のアルバートさんは、週一で水泳や絵画をしたり、美術館にもよく行く。「最近ではホームアドバイザーの訪問回数が減らされているので不満だけどね」。曲がり角の向こうはバラ色だけではないようだけれど、ここは北欧・デンマーク。福祉国家のコンセンサスは小さな町でもゆるがない。

◆◆◆

日中に充実した活動をして、その後はゆったりと仲間と過ごせる場が欲しい。「働く」は、端を楽にする、人のために役立つ「はたらく」こと。自分のために楽しむことは「道楽（どうらく）」。「道（みち）らく」。この「はたらく」と「道らく」が日々の暮らしのなかで統一されて人生は豊かになる。それが北欧を訪ねる度に確信になっている。

北欧Ⅱ幸せのものさし

障害者権利条約のいきる町で

最終回 はたらく道らく

みち

文・写真 園部英夫

全国障害者問題研究会事務局長